

都萬太夫その他

都萬太夫の素性

日本の劇場で女藝の禁止されたのが、寛永六年、それと共に若紫歌舞伎が擡頭し、三都に劇場が競ひ建つた。元和三年京では四條の河原の中島に只一軒の芝居があつたばかり。これが元和年中に七ヶ處の櫓が許可されてゐる。その七座の一人に都萬太夫がある。都萬太夫座は、元祿期の名優、傾城買總本山の坂田藤十郎によつて有名であることは、誰でもが承知の事であり、近松門左衛門は初め都萬太夫座の狂言作者であつた事も周知の事實である。然し都萬太夫は何者であつたかは、或は知る人が稀れであらう。

ところが「許多脚色帖」の内に、「可盃總論」といふ初期役者評判記が貼込まれてゐる。この評判記によると、都萬太夫の素性——前身がハツキリと判る。それにはかうある。

萬太夫といふは幼きより攝州大阪に人となり明くれ淨るりをこのむついに井上大和少掾貞則を師として五音の開合ことばの甲おつ、つりがね三重のうなりまでならひえて過し寛文極月廿六日口宜を給はり越後目橋貞勝（カクメン）となりの此名邊に人形のかほみせず、もとより貞勝大をん天を響かせ近藤權右衛門もはづるばかりなれば木戸にきせん袖をつらぬ、されど今春流のとごこほり

ありて聲ひしとかれたりこれより上るり語るに便なく、歎を申上しかば寛文八年更に物まねかぶきの名題を下され都萬太夫となる、それより此座せみの小川の流つきず、ぜうくとして絶ひることなし

とあるので萬太夫の前身は井上播磨掾の門弟で淨るり太夫であつた事が判る。

この「可盃」といふ評判記は、貞享二年の廣益書籍目録に野郎評判として載せてあるが、私が寓目したのが、これが初めてで、恐らく他には傳本があるまい。刊行は延寶四年丙辰七月で、この書の鼻毛、柱に「品定下」の三字がある。そして卷末の最終丁に

花見車 熊谷笠 可盃三札評判

西澤 太兵衛 開板

とあるのを見ると、「可盃」は「芝居(?)品定」の下の巻で、花見車、熊笠とともに三都の野郎評判を成してゐるものと想像される。後の八文字屋の横本黒表紙の三都評判記は、この體裁を學んだものであらうか。尤も「可盃」は半紙本である。

萬太夫の口宜案

京の都萬太夫は、井上播磨掾の門弟で、淨るり語りであつた事を、「許多脚色帳」貼込みの役者評判記「可盃惣論」の一文で判明した。

即ち萬太夫は、播磨掾が井上大和少掾時代の門弟で、高聲の淨るりを語つた事、又寛文三年極月廿六日、越後目橋貞勝となり、口宜を賜はつたが、その口宜案左の如し。

口 宜 案

上郷中御門大納言

寛文三年十二月廿六日

藤 原 貞 勝

宜 任 越 後 目

藏人頭右中辨 藤 原 光 雄 奉

と上野圖書館にある榊原芳野氏の傳本にある。今日まで上野圖書館のこの口宜案を寓目された方は多からうが、それが都萬太夫の口宜案とは心付かれなかつた事と思ふ。

尙右の「可盃」を引用した文中に「今春流のとゞこほりありて聲ひしとかれたり」とある、こ

の「今春流のとゞこほり」といふのは何の事であるか、このとゞこほりのために、聲が咳れ淨るり語りになつてゐられないので、物まね、かぶきの名題を下されたとあるが「今春流のとゞこほり」とは何であるか。「今春流」と讀んでいゝのか、それならば能の「金春流」か、聲のひしとかれたのが、今春流のとゞこほりとある。その「とゞこほり」とは何ういふのか。

「娘道成寺」の道行

日本舞踊の王座を占めてゐるものに「道成寺」のあることは、何人も知つてゐる。「道成寺」を謡から取入れたのは、元祖榊山小四郎、これを歌舞伎の所作事にして、一時代を劃したのが瀬川菊之丞、爾來いろ／＼な「道成寺」が出来たのを、終に集大成して完成したのが、江戸中村座における寶曆三年三月の初代中村富十郎の初演、これらについては、もう新らしく申すべき餘地もない位、いろ／＼な方面から道成寺研究は完成してゐるといつていい。ところで、この中村富十郎が、寶曆十年辰の顔見世に大阪道頓堀角の芝居（座本中山文七）へ乗入んで、十二月廿二日から、二の替りとして「九州釣鐘岬」を出し、その大切に「江戸みやげ所作事」として、

咲からは龍頭へ
とゞけ山ざくら道成寺

都萬太夫その他

を「中村富十郎相勤申候」とある。

これだけならば、寶曆三年三月「京鹿子」で道成寺を大成して大當りを取り、各地で幾度も演じ、寶曆十年に完成後七年にして「江戸みやげ」として初めて、「京鹿子娘道成寺」を大阪へ持つて来たといふだけだが、道成寺には御承知の如く、第一段が道行である。そしてこの道行は能樂の「道成寺」から、歌舞伎の舞臺へ移植されて、始めて出來た形式上の一特色と見ていゝ。即ち「傾城道成寺」「百千鳥道成寺」皆然り。「傾城道成寺」の「傾城」が、「娘」となつて「百千鳥」を生んだ。共に瀬川菊之丞が主役である。この「百千鳥」の系統から、中村富十郎の「京鹿子」が出てゐる。が、「京鹿子」の初演に果して道行があつたか何うかは、今日まで疑問にされてゐる。「京鹿子」としての道行の記録は、ズツトの後の文政六年三月坂東彦三郎が勤めた時しかない。そしてその歌詞も、淨るり名も傳つてゐない。只節付が竹本であつたといふだけが判明してゐるといふ事である。(九重左近氏著「江戸近世舞踊史、道成寺舞踊」参照)

大阪三藏圓の「許多脚色帖」には、寶曆十年の角の芝居の「江戸みやげ」に、竹本で道行の歌詞が残つてゐる。この年に道行があるのであるから、富十郎初演の寶曆三年の中村座の時にも道行に、この通りのものがあつたと推定してもさう無稽な事ではあるまいかと思ふ。

この時の名題が

九州釣鐘師 六番續き

とあり、

江戸みやげ 「ちぐさ結び」

にて、唄本の版元は正本屋西澤九左衛門版。

竹本は、

ワ キ 豊 竹 灘 太 夫

太 夫 豊 竹 林 太 夫

三 味 線 鶴 澤 伊 三 郎

にて、歌詞は左の通りである。

月は程なく入しほのくく けむりみちくる小松原。いそぐとすれど戀風のふり袖おもくふきた
まりひらりぼうしのふはくくと しどけなりふりヲ、はづかしや えんをいのりの神ならで
かねのくやうへ物すきまいりあぢなむすめと人ごとに わらはごわらへもちどり 君とねし
よのきぬくの あかねわかれのかなしさを 思へばにくや世の中のかねもくだけよしゆも

都萬太夫その他

くもおれよ さりとはく戀をしらざるかねつきの なさけないぞやうらめしと わするこひ
 まもなみだ川 こひのこほりにとぢられて身をきりくだくうき思ひ 戀をする身ははまべのち
 どり 夜ごとく袖しぼる しよんがへ 君にあふ夜はこすへのからす かはいくとひき
 よせて しよんがへ かはすまくらのかねごとに またの御けんはいつかはと 心づくしのと
 し月は かどに松たつあしたより 梅が香にほふまどの内 さくらもちりてさなへとる 螢の
 タアさみだれに かやりふすぶる軒のつま 秋風そよとおとづれて たのにおつるかりのこ
 ゑ げに月ならば十三夜 菊の下露ぬれそめて つま戀いぬるさを鹿や おしのふすまのうす
 ごふり 是皆戀の色とかに うつるや四きの折ごとに 君とひよくの床の内 かたり明さぬよ
 はもなし わかれおしめどあかつきの かねはやなりて鳥の聲 たゞ我をのみ追くるかと と
 がなきかねを恨にし 此つみとがの數々は よむ共つきぬまさごちを 一人かこちて行道も
 いそぐ心か まだくれぬ 日あしも高き櫻かげ しばしとこそたどりける

この歌詞の初めの方には、道成寺道行としては古い方である「長歌古今集」(天和二年刊)に見え
 てゐる「月は程なく」の句がそのまゝ踏襲されてゐる。こゝで「道行」といふのは普通花道で踊
 つてゐるのをいふのである。

今一つ注意すべきは、この道行「ちぐさ結び」の表紙繪が、櫻の咲誇つてゐる下に、鐘があり中村富士郎は、白拍子で手には一管の筆を持つて踊つてゐるところを描いてある。「戀の手習」の條りだらうが、筆をどういふ手順で舞臺へ出したらうか、珍らしい舞臺である。

『佛の原』の後日

近松門左衛門作の歌舞伎狂言に傑作と許すべき『傾城佛の原』のある事は何人も承知の事である。近松自身もこの作は餘ほど得意であつたと見え、淨るりの『天鼓』に同じ趣向を踏襲してゐる事でも判るし、又、その後日『龍女淵』があり、三の後日に『三階藏』のあることによつて見るも、又その主演者の坂田藤十郎が、藏を建て、又座本となつたに觀ても、興行的にも成功した事が判る。

然るに近松の『傾城佛の原』が、元祿十二年正月に京都、都萬太夫座で興行すると、追冠せて大阪の嵐三右衛門座では、同年同月、水島四郎兵衛作『傾城佛の原』で興行してゐる。この事は別項「異本傾城佛の原」の一文で、紹介しておいた。

ところで、近松のこの『佛の原』は三部作である、後日の『龍女淵』がまだ發見されない。そ

して三の後日である『三階藏』を關根正直博士の文庫に發見して、高野班山博士が歌舞伎研究で發表され、これが高野博士の『日本演劇の研究』の第二集に收録されてゐる事は誰れもが知つてゐよう。ところが、この『佛の原』の後日の『龍女淵』の同じく追冠せだらうと推定されるのが同じく大阪嵐三右衛門座で上演された。作者も『佛の原』と同じく水島四郎兵衛であることが狂言本の發見によつて判つた。

かうなると、京の都萬太夫の方は、後日が發見されないで、三の後日の『三階藏』が發見された。大阪の嵐三右衛門座の方は三の後日までも同じ水島で作で上演したか否かは知らないが、三の後日が同じく上演されたのぢやないかと想像すること、あながち無稽の事でもあるまいかと思はれる。

大阪の「後日」は、左のやうな狂言本が、ゐるのである。

ほとけの原後日

けいせい蓮川

なみだのふちにしづむ今川

と外題があつて、傍題簽には

女形 玉川半太夫

あらし三右衛門座

女がた 浅尾重次郎

とあり、版元は、上久寶寺町三丁目正本屋九右衛門。

上 けいせいすて小舟

島だいの座敷よめ さし合た
しうげん

中 けいせいほうが帳

すゝしのかやに枕二つ ならべた
きやうだい

下 けいせいうらぼん

あげまき心中 ときわのいろ
ねびきの松

とあり、役人替名は左の如し。

梅川 文藏 嵐三右衛門

家老
望月 定右衛門

山下 又四郎

同 は、松本小左衛門

舍弟 大助

中村 四郎五郎

弟 原田角之丞 村井三郎左衛門

いもと おさき

松本 三之介

都萬太夫その他

あほう	三五郎	あづま三八	禿	とのや	玉川半三郎
竹	姫	嵐富五郎	け	うしうい	嵐三四郎
大村一角	杉山勘太郎	禿	もじの	嵐しろ彌	
けいせい揚卷	(女形)玉川半太夫	けいせい	勝山	嵐辨十郎	
おやてつさん	三原十太夫	けいせい	若紫	淺尾念之助	
才山の井源八	伊藤妻右衛門	く	つは丸屋權七	上村平八	
揚卷禿いさの	藤田市三郎	く	つは山田清八	中村袖之介	
腰元つね	玉川半七	たい	こ文七	松山平九郎	
同	うば	吉川八兵衛	狂言	作者	水島四郎兵衛
けいせい今川	(女形)淺尾十次郎				

この狂言本の挿繪を見ると、「竹姫おんりゆう龍となる」などの説明句があつて、本水を使つて、水機巧を盛んに舞臺に使用してゐることが判るがこの作の上演年月は、私は知らない。

